吉原幻想草紙

緋羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吉原幻想草紙

【Ｎコード】
Ｎ３１３５Ｙ

【作者名】
緋羽

【あらすじ】
身体を売って生きる蝶々。女郎屋で働く遊女たちは、自身の誇りを灯として宵闇を照らし続ける。吉原を軸に紡がれる、史実無根の花魁草紙。

1（前書き）

［蜘蛛の章］

出雲（イズモ）…遊廓に売られた少女。本名は八雲（ヤクモ）。

伊織（イオリ）…遊女。愛称は蠍（サソリ）。

雛菊（ヒナギク）…遊女。愛称は燕（ツバメ）。

1

夜の蝶々が羽を広げる活気賑わう光の世界。女は身体を晒し、自らの魅力を最大限の魅惑に変えて、夢を求める男達を虜にする。

露出した胸の膨らみをだらしのない顔で物色する助平な客には、慣れた文句で唾をつける。

「そこのあんた、楽しい夢を見たくはないかい？ちょいとあたしを買ってみなんし」

客引きの雇われ店主は、一人でも上客を増やそうと片っ端から媚びを売る。

「おお、旦那様はお目が高い！この子はこう見えても店一番の器量良しなんでございますよ！

まあ、ちょいとばかし値は張りますがね、へへへ…」

まるでこの世の天国よろしく上気した顔が溢れる中で、これまた見慣れ聞き慣れた、泣きわめく女が数人の極道に引きずられていく姿。

「やめて、離して！」

必死に抵抗する八雲。

「何だお嬢ちゃん、親父の借金を返してくれるって言ったろう？」

「私は…、今晩付き合えばおとっつぁんを助けてくれるって言うから…！」

「嘘は言ってないだろう？

今晩付き合ってくれりゃあ今晩は親父を助けてやる、明晩付き合ってくれりゃあ明晩も助けてやる。

ただし、付き合ってくれない晩は僕たち拗ねちゃうかも…、なあ皆？」

「八雲ちゃんが居ないと僕たち拗ねちゃうよぉ！…ふふ、ははははは！！」
「…くっ、この外道！」
「違うな、外道じゃなくて極道さ、ひはははは！！！」

＊

心を閉ざし涙も流さぬ少女が連れて来られたのは、珍しくもなんともない宿の一室。窓には明るい色の格子がはめられ、売られてきた女の誰もが一度は試みた足抜けを、冷たく阻む。

ドンッと突き出され転げ込んだ広い部屋のあちらこちらで、さして興味も無い見慣れた風景を無視するように、唇や頬に紅を乗せる女たち。

美しい彼女らに目を奪われていた八雲の後ろで、煙管をくわえた女によってかけられた鍵の音が冷たく響いた。

外に面する大窓と同じように、扉に開けられた小窓にも格子がはめられ、だがその色は暗く錆び付いた色であったが。

2

その小窓から顔を覗かせ、煙管の女が言葉を投げる。
「親父さんの借金分、ようさん働き返しんさいな」
「ここで働くの？だってここって…」
「そうさ、女郎屋だよ」
口に含んだ煙を冷たい表情で部屋に吹き入れ、女は廊下の奥へと消えて行った。

「嬢ちゃん、売られたのかい？」
誰もいない扉に向かい茫然と立ちすくむ八雲にかけられた声があった。
振り返ると、先程までとは打って変わり、興味深げに見つめる女、女、女。

「伊織おいで、仕事だよ！」
別方向にある襖の向こうから呼ぶ声がして、八雲に話しかけてきた女がけだるそうに立ち上がる。
「あたしは蠍よ、よろしくね」
伊織と呼ばれ蠍と名乗った女は、座敷の奥へと消えていく。仕事をこなすために。

「サソリ？…イオリ？」
混乱する八雲に別の女が声をかけた。
「伊織は源氏名、蠍は愛称さ。ちなみにあたしのことは燕と呼んどくれ。
雛菊なんて立派な名もあるんだけどね、菊なんかより、あたしは空を飛ぶ燕の方が好きだからさ」
「…よくわからないんですけど」

自然と敬語になる八雲を可笑しそうに笑い、彼女は真っ赤な紅を、くちづけするように八雲の唇につける。
「あんたは遊女になったんだ。目指すは太夫、それとも格子かい？ふふふ、手前の人生嘆くより、楽しく生きていこうじゃないか。
人に決められた名に縛られるな。ここの仲間の前でくらい、あんたはあんた自身で決めた名を名乗んな」

雛菊は自分のかんざしを八雲の髪に刺してやった。
「私はさっき『あんたは今日から出雲だ』って言われたから…、私の名前はイズモです…」
「そうかい。まあいいさ、誰だって最初から手前の苦遇を受け入れられるわけじゃない。
出雲、…手前の人生に負けんじゃないよ」

＊

3

最も人で賑わう時間、夜でも明るいまさに不夜城。悲しむ暇すら与えられず、早くも男に買われる出雲。
抵抗するのは早々に諦め、しおらしく豚鼻の糞野郎に礼を尽くす。
「出雲と申します、よろしくお願いいたします」
「出雲ちゃんか、楽しい夜になりそうだねぇ、うひょひょ…」

＊

何度も、何度も…、這い回る舌を通し…、甘い味と花の様な香りを感じて…。
綺麗とは程遠いその造形…、柔らかく脂っこい男の身体。
下腹部が疼き、足の付け根からは意思と相反する蜜が垂れ、男を溺れ殺したいかのように卑猥に溢れ出す。
実際、男は死んでいたのだが。

男の身体には刃物、ならぬかんざしが刺さっている。昼間に雛菊からもらったかんざしが。
出雲が舌を這わせ蜜を垂れ流すほどに、男の排泄物と血が、時間の経過とともに、ゆっくり…、ゆっくり…、床を湿らせていく。

僅かに開いた襖の隙間から覗きこんだ遊女の一人が、悲鳴をあげるでもなく部屋に入り込む。
「どうしたんだい？」
「あ…、蠍さん…。
この人がもっと刺激をくれと言うから、刺したんです。何度も、何度も…。
そしたら…、逝ってしまったみたい…」

口笛を吹いて豪快に笑いながら、雇われ掃除夫達を呼ぶ伊織。
「あんたら、掃除しといとくれ。
お客さんが臓物ぶちまけて逝っちまったんだとさ」
数人の男が駆け付け、慣れた手つきで死体を片付けた。

＊

「ははは、あんたなかなかやるねぇ、気に入ったよ！
出雲だっけ？ここはこんな所だけどね、だからこそ仲間の絆は強いってもんさ。
上客には誠意を持ち、クズには死を持って相手すれば良いんだよ！はっははは！！」
「…蠍さん、燕さん、皆さん、私決めました。
自分の人生、自分で決めます。
手前の人生に負けてたまるか！」
「よく言った！」
「あたしら皆、あんたの味方だよ！」
「出雲、これからも楽しもうぜ！！！」

4

遊女達の拍手喝采を浴び、それが自分を元気付けてくれるための過剰な言葉だと気付いていても、出雲は素直に喜んだ。
そして昼から考えていた文句を告げる。
「私は自分で名を決めます。
八雲ではない、出雲でもない、私がこれから名乗る名前は…、蜘蛛。
雲のような自由はなくとも、蜘蛛のようにしぶとく生きてみせる！
そして目指すは花魁太夫！！！」

呆気にとられる一同。笑いを堪えつつ、伊織が問う。
「…あんた、花魁とか太夫とか、意味わかって言ってんのかい？」
「わからないけど目指します！」

室内が一瞬の沈黙に包まれた後、笑いと歓声が沸き起こった。
「あはははは！あんた最高だよ！
確かにあんたは蜘蛛だね、まさに女郎蜘蛛さ！
あっはははは！！！」
涙を流して大笑いする伊織を筆頭に、再び浴びせられる拍手喝采。
気恥ずかしさと若干の誇らしさを胸に抱いて、頬を鮮紅に染める出雲の顔には、年相応の愛らしい笑顔が戻っていた。

＊

脱皮を繰り返す女郎蜘蛛は、腹部下面に鮮紅色の紋がある。女郎として働く出雲の腹部にも、時折、薄紅色の紋があった。
それは、ある時は男の血、ある時は自らの女の証。またある時は、仲間の遊女との戯れの名残として、麗しい唇の痕が残っているので

あった。

＊

夜の蝶々が羽を広げる活気賑わう光の世界。女は身体を晒し、自らの魅力を最大限の魅惑に変えて、夢を求める男達を虜にする。

露出した胸の膨らみをだらしのない顔で物色する助平な客には、慣れた文句で唾をつける。

「そこのあんた、楽しい夢を見たくはないかい？ちょいとあたしを買ってみなんし」

一柄財布の紐と同じように緩みきった客の口元、その口から発せられる問いに、遊女が艶やかな視線と舌舐めずりを見せつけ、そして答える。

「あたしの名かい？

あたしは蜘蛛、……女郎蜘蛛さ」

1（前書き）

［松葉崩しの章］

瀬川（せがわ）…吉原大見世『松葉屋（まつばや）』の世話役。元遊女。

弥衛門（やえもん）…吉原花街で仲介業を生業とする女衒（ぜげん）。

お仙（せん）…茶店『鍵屋（かぎや）』の看板娘。

1

煙管をくわえ、煙を吐き出し、窮屈そうな胸元を手でさすりながら通りを歩いていく女。歳の頃は四十を越えない程度だろうか。
だが、年増と見るには綺麗すぎるような、怪しげな魅力を醸し出している。その証に、すれ違う男の半数は、彼女の顔や胸もしくは下腹部を見つめ、鼻の下を伸ばしたり目元を垂らしたり、下衆と呼ぶに相応しい顔付きになっていた。

残り半数は主に十六にも満たないであろう童だったが、興味が無いのか、はたまた無いフリをしているのか、何事もなく通り過ぎていく。
彼らにはまだ理解し得ない魅力なのだろうか。

女は遠くの茶店に座る男を見つけ、小走りに近づいていく。
トットットッと軽く弾むように歩を進めるたびに胸元が揺れ、通りを歩く童も思わず視線を向けかける。
「よう、瀬川姐さん」
「姐さんはよしとくれ、老けちまいそうだって言ったじゃないか」
瀬川はわざと怒ったような口調で言ったがその声は柔らかいもので、本心からの怒りでは無いことがすぐにわかる。

ハハハッと明るく笑う男の名は弥衛門。
瀬川が生きた年数の半分をようやく過ぎたくらいで、彼女から見ればまだほんの小僧に過ぎなかった。
「なあ姐さん、こないだの娘…、どんな塩梅だい？」
「あんたが連れて来た娘かい？
初めは駄々をこねてたけどね、今じゃしっかりやってるよ。伊織が率先して面倒見てやってるみたいだしね」

父親の借金返済のためになかば強引に連れて来られた、まだ年端もいかぬ田舎娘。吉原大門で初めて彼女を見た時、遊女になりきるのは無理だろうな、そう感じたのを弥衛門は思い出していた。

女衒である弥衛門の役目は、将来の花魁を大門から女郎屋へ連れていくこと。嫌がる少女を何人連行したことか…、いつからか可哀相だなと思う感覚はほとんど機能しなくなっていた。

みなしごの弥衛門は幼い時分からこの職（…と言って良いものかわからないが）についているため、年齢の割に”すれている”と自負していた。

2

「あの娘の名前はもう決めたのかい？」
「出雲にしたよ。でも所詮はさ、客に選んでもらう”印”としての仮の名なんだから何でも良いさねえ…。
かくいうあたしも、仮の名を背負って生きていることに変わりはないよ。
まあもっとも、本当の名なんて忘れちまったけどね、ハハハッ」

弥衛門はその境遇からか、相手の言葉の内に含まれる偽りはだいたい見抜ける、という特技を持っていた。
嗅覚とも言えるその敏感な感覚がにわかに反応したが、特に追究するようなことはしなかった。
「姐さんの本当の名はなんていうんだろうなあ？」
わざとらしく甘えた声で聞いてみたが、
「忘れたって言ってんだろう」
先程よりも強めの感情を感じさせる瀬川の声に、次に発しかけた言葉を飲み込んだ。

瀬川は瀬川で、一瞬ではあるが自分の声が悲しみを含んだものになりそうだったため、無理矢理普通を装って話していた。
それが余計に不自然な印象を与えていることはもちろんわかっており、勘の鋭い弥衛門がそのことに気付いているであろうことも知っていたが、それこそ瀬川自身の生きてきた世界によって育まれた不必要なプライドが、頭をもたげているようだった。

「姐さんはいつまで吉原で暮らすんだい？」
「この命が尽きるまでさね。
身体を売って金を稼ぐ、遊郭独特の空気が好きなのさ…」

どこかに嘘が混じってる、弥衛門はそう感じた。
たった数秒の沈黙が、とても長かった。

「お兄さん、いつもひいきにしていただいてありがとうございます！
お茶のおかわりはいかがですか？」
その沈黙を明るい声でやぶったのは、茶店『鍵屋』の看板娘、お仙。
店に通い詰めて機会を”狙っている”男も多いと噂されるほどの娘、お仙に声をかけられた弥衛門は、「どうも」とだけ短く答え、注いでもらったばかりの熱いお茶を瀬川に差し出した。
「今日は買い出しだったのかい？
疲れたろう、ちょっと休んでいきなよ」

3

瀬川は歳相応の無邪気な笑顔で言う弥衛門の隣に座り、「どうもね」と幾つかの意味を包含させた感謝の言葉を告げた。
そんな二人のやり取りを後ろから見ていたお仙は、面白くなさそうに、フイッと店の奥に戻っていった。

＊

「そういえばあんた、なんでわかったんだい？」
「なにが？」
「買い出しだよ。見てわかるような恰好じゃないだろう？」
「沈んだ表情、息遣い、目線、見てればわかるのさ、普段と全然違うからな。
いつも姐さんを見てるから、ちょっとした変化でもすぐにわかるのさ」

言って少し頬を紅潮させた弥衛門。恰好付けて大人びた台詞を吐いてみても、所詮はまだ子供なのだ。
フフッと珍しく含み笑いをする瀬川も、湯呑みから立ち上る熱い蒸気のせいか、ほんのわずかだったが少女のように頬を紅潮させていた。
「”買い出し”は…、いつまでたっても慣れないもんさね…」

二人が言う”買い出し”とは、一般的な意味でのそれではない。吉原花街の遊女屋、瀬川が在籍する店『松葉屋』で用いられる隠語である。
もちろん店によって差異はあるが、大低の場合は年に何度か、必要以上の”商品”を抱えてしまう時期がある。

盆や正月さらには桜の咲く頃になると、悪い頭を突き合わせた輩による博打その他の遊びが急増し、こちらからあちらへ、あちらからそちらへと、銭の転がし合いが行われる。

そんな状況で良い思いをする者もいれば、逆に良くない思いをする者もいることは想像に難くない。

しかもお上に知られると困るような遊びばかりであるため訴えることも何もできず、親の身勝手な自己保身のせいで、結果的に売られる商品つまり娘が増えるというわけだ。

遊女となった皆が皆、金を生む木になるとは限らない。

他と比べると夜には映えない顔立ちであったり、いくら器量が良くても接客ができずに俯いてばかりであったり、いわゆる落ちこぼれを抱えてしまった店はたまったものではない。

4

金を生むどころか金を喰う虫になってしまう。そんな下位の遊女は、遊女屋からも棄てられ、棄てられた女は舟に乗せられ、どこかへと連れていかれる。

どこへ連れていかれるのかは、”下位出し”の使いの役目を担う瀬川ですら知らなかったし、また知りたいとも思わなかった。

泣き叫ぶ女、屍のように全てなされるがままの女、舟に乗せられる時の反応は様々あるが、今日送ってきた娘は少し違っていた。

しっかりと自分の足で歩き、まるでそう望むかのように舟に乗り、そして…。

沖に出てその姿が見えなく時まで、ずっと、ジッと、無表情な眼差しを瀬川に向けていた。

彼女の目を忘れることはしばらく無理だろう。瀬川は痛む胸、その奥をさするようにしながらここまで帰ってきたのであった。

「姐さんは前まですげえ高い位についていた人気女郎だったのに、なんで今はそんな雑用みたいなことやってるのさ。

客前に出れば、おそらく伊織や雛菊なんて目じゃないだろう？

今だって全然…、綺麗じゃないか」

弥衛門は真っ赤になった頬を隠すように俯きながら、瀬川から湯呑みを奪い、汚い音を立てて茶をすすった。

弥衛門が自分に好意を抱いてくれていることは、以前からなんとなくわかっていた。それはただ、年端もいかぬ坊の淡い憧れなのかもしれない。

だがたとえそうだとしても、瀬川は弥衛門の素直な気遣いがいつも嬉しかった。

もしも店に出れば、実際まだまだ良い線はいけると思う。だけど自分のような役割は必要なんだ。
女郎としての辛苦を理解している自分が裏方に徹し、大切な娘達を世話し、店から出される子を最後までしっかりと見送る。
所詮は自己満足に過ぎないのかもしれないが、瀬川はそんな今の生き方が嫌いではなかった。

「あたしなんてもう婆だよ。
その気になってりゃ、今頃あんたくらいの歳の子がいてもおかしくないのさ」
「姐さんが母様だったら楽しいかもな…、いや、でも…」
瀬川は一人でブツブツ言っている弥衛門を横目に勢いよく立ち上がり、尻についた木屑をパパンッと掃った。

5

「さっ、雑用係はそろそろ帰るよ！
あたしがいなきゃあの娘達は飯すら作らず餓死しちまう、ハハハッ」
「もしも何かあった時には言ってくれよな、姐さんのためなら何でもするから！
もう小僧じゃないからさ！！」

まだまだ小僧だな、瀬川はそう思ったが、真剣な表情で自分を見つめる弥衛門にそれは言わないでおいた。
どんなに望んでも、どうにもならないことだってたくさんある。
あんたにも、あたしにも…。
でも…、ありがとう…。

「なんでもしてくれるのかい？」
意地悪い顔をした瀬川に問われた弥衛門は一瞬たじろいだが、それでも言った。
「ああ」
「……」

フイッと背を向け、カロンッカロンッと軽い足音だけを響かせながら、何も言わずに松葉屋の方へと歩いていく瀬川。それを黙って見送る弥衛門に、そのまま振り向かずに言葉を投げる。
「だったらまず、姐さんって呼ぶのをやめとくれ」
「わかったよ、瀬川姐さん！」
「ハハハハッ、やっぱりあんたは小僧だよ！」
明るい声と共に笑い声が溢れる背中。左肩の少し上から見える後

ろ手が、ヒラヒラと振られている。
「小僧じゃないって言ってんだろ！
またなー、姐さーん！！！」
同じように明るく大声で返した弥衛門は、慕う女の背が見えなくなるまで、ブンブンと両手を降り続けていた。

＊

瀬川はまた少し気持ちが楽になったことを実感し、自分にとっても大切な存在になりつつある男の存在を、強く感じていた。
「あたしはもう婆だよ。それに、汚れちまった遊女なのさ。
綺麗なあんたとは違うんだよ…」

カロンッカロンッと歩きながら、小さな声で独りごちていた。
それでもどこか明るい気持ちでいられるのがそんな男のおかげであることは、否定しなかった。

陽が沈み、灯がともる。
今宵もまた、夜の街が賑わい始める…。

1（前書き）

［煙草の章］

雛菊（ひなぎく）…遊女。愛称は燕（つばめ）。

夕霧（ゆうぎり）…最上位の遊女、太夫。愛称は茶鯉（ちゃごい）。

1

私は真面目で素直な子供でした。周りの大人は礼儀に厳しく、指南所の友は撫子ばかり。
それで良かったんです。私は真面目に、普通に成長していきました。

でも、私は変わりました。
あなたが、私を変えました。

煙草は極道が吸うものだと思っていました。そんな煙草を、私の前で美味しそうにくゆらすあなたを見て、悪者代表と言わんばかりに罵りました。

「変わってるな、お前。
これを吸ったら極道、吸わなきゃ役人か？
随分単純な思考回路なんだな、ウハハハハ」

悪者に単純だと言われた私は、とても傷つきました…。

とても…、とても……、ムカついたの！！！

あたしはあんたから煙草を奪い、めいいっぱい吸い込んだ。涙が出た、頭がクラクラした。
こんなもののどこが美味しいの！？
それでも、子供だったあたしは、意地を張ってまた吸い込んだ。

「おいっ…」

あんたが困り顔になってあたしの手から煙草を取り返そうとしたけれど、あたしはがむしゃらに抵抗した。
涙で前が見えなかった。

「おいっ！」

涙を拭うために目を擦ろうとしたあたしは、その怒鳴り声に身体を強張らせた。
「ご、ごめんなさ…」

あんたは脂臭い指であたしの涙を優しく拭い、そっと煙草を掴み取った。

「火、危ないから。
火傷したら俺の責任になるだろうが」

火傷してたの、その時。
焦がれた心のミミズ腫れ、責任とってもらうからね。

＊

2

数年後、あんたは本当に責任をとってくれた。
…ありがとう。
だけどすぐ死んだ。
…馬鹿野郎。

＊

ため息のついでに煙草の煙を吐き出しながら、あたしは思い出していた。
彼の最後の言葉、いつまでも忘れられない言葉。
「煙草は吸うなよ。
きっといつか、好きな奴の子供を産むんだから」
肺を真っ黒にして死んだあんたに、そんなこと言われる筋合いないわ。
そういえば、初めて出会った時もあんたは煙草をくゆらせていたっけ。
喧嘩したときにいつもあたしが言っていた言葉、覚えてる？
「あんたなんか煙で真っ黒になって、さっさと死んじゃえばいいのよ！」
決まってこう言い返された。

「そりゃあ本望だな」

あんたがそう言う時の意地悪い笑顔が憎たらしくて、‥‥大好きだったよ。本当に死んでどうするのよ、馬鹿。

あたしは煙草の煙にあんたの面影を見てる。だから、禁煙できないのはあんたのせいだ。

あれから幾年か経った今、私は煙草を吸っている。あんたの好きな重喫煙者になっちゃったわ。

気づいてたんだよ。あの言葉はあんたなりの『幸せになれよ』だったんでしょ。

馬鹿じゃないの、あんたがいなけりゃ幸せになれるわけないじゃない。

餓鬼みたいに楽しそうな笑顔で、冗談みたいな臭い台詞ばかり言っていた。あんたはしたり顔だったけれど、臭かったのは台詞じゃなくて口。脂臭いのよ。

まあ…、その脂臭い口づけが好きだったけどね。

3

煙草の匂いとなにげに上手い舌使いに、いつもクラクラしてたわ。この助平オヤジ。

吐き出した煙を見上げながら、あたしは今日も毒を吐く。
ちゃんとそこにいるんでしょうね。あんたが愛した女とあんたが残した命、しっかり見守ってなさいよ。

煙の中にゆらめくその面影をまた見つけ、目にうっすらと涙が滲んだ。

「目に染みるなら煙草やめなよー」

また怒られちゃったわ。

「はいはい。まったく…、口うるさいのは誰に似たんだか・・・・」
「母さんじゃないなら父さんなんじゃないのー？
こうやって注意して貰えるだけ有り難いでしょ！」
「そうね…。あんたがいるから私は今でも幸せだよ」

煙を振り払いながら新しい煙草に火をつけたら、口うるさい息子にまた怒られた。

なに笑ってるのよ。あんたなんて、あたしが煙草吸わなきゃ出て来られないんでしょう。

なによ、そんな恨めしそうな顔してさ。悔しかったら生き返ってみなさいよ、馬鹿。

じゃないとあんたの顔、忘れちゃうよ。

‥‥嘘だけどね。

うろ覚えくらいには覚えといてあげる。

＊

パタパタパタ……。

息子が羽ばたいている‥‥。

じゃなくて、あたしが吐き出した煙を嫌い、手で一生懸命あおいでいる。

「そんなに嫌なの？」

「嫌だよー」

「どうしてさ？」

「だって…、」

『そこには俺がいないから』

4

……目眩がした。

なんて臭い台詞、そして、なんて意味不明な言葉。やっぱりこの子はあんたの子だわ……。

フゥー…。

あたしはまたわざと多めの煙を吐き出し、マセた我が子をからかった。

煙が目に染みたのか涙目になりながらも、全身で煙を追い払おうとする、愛しい馬鹿息子。

あたしもなんだか馬鹿らしくなっちゃったから、あんたらに誓ってやるよ。

「煙草、辞めるわ」

「うーそーだー！！！」

全力で否定しやがった、この野郎。

「辞めるったら辞めるんだよ！

あたしの決意をなめんじゃないよ！！」

「…わかったよー、がんばって！」

全く信じていない息子の顔は、いつか見たような意地悪い笑顔だった。あたしはその顔が大好きだよ。

遠い日の思い出と目の前の現実を煙の中で重ねながら、新しい煙

草に火をつける。

「やっぱり吸ってるー」

「うるさい、これで本当に最後だって」

勢いよく吐き出した煙の中に、二重の笑顔が見えた。意地悪くて愛しい笑顔が、見えた気がした。

好きな人の子供…、煙草を吸っててもきちんと産めたよ。

あんたの子供…、煙草を吸いながらでもしっかり育ててるよ。

ねえ、あたしは今、すごく幸せに生きてるよ。

あんたは、幸せに死んでるんでしょうね。

『好きなんだ！

これまでも、これからも！』

脈絡のない告白に、あたしは顔を赤らめた。

あんたの息子は順調に育ってるよ。大人になったらきっと接吻も上手くなるわ。

だって、あたしとあんたの子だからね。

5

「……」

これで本当に最後にしよう。

そう思いながら新しい煙草を口にくわえたら、息子が笑顔で火を差し出してくれた。

あたしも好きだ。

「あたしも好きだ、これまでも、これからも！

こんなに好きなこの煙草、死ぬまで辞めてやらないんだから！」

巻き上がる煙の向こうで、意地の悪い笑顔が揺れていた。

＊

「……姫」

左頬には淑やかな感触があり、右頬には柔風に似た感覚があった。

そして耳元で何者かが囁く声。

「…菊姫、起きなんし菊姫」

何度目かの呼びかけに反応し、ようやく夢から醒める雛菊。

「…おはよう、鯉お姐さん」

雛菊は心地の良い姉女郎の膝枕から、惜しむように身体を起こして大きく欠伸した。

大見世『松葉屋』に在籍する、その女の名は夕霧。

多数の遊び女が集う幻想花街・吉原の中でも数少ない最上位女郎に与えられる呼称・太夫を冠し、番付でも当たり前のように常に上

位に位置している部屋持ち女郎、夕霧太夫、その人である。

陽が傾いた頃、用の為に呼ばれた禿の代わりに夕霧の部屋へとやって来て、雛菊は言った。

「暇だったの」と。

遊廓は普通、暇だからというただそれだけの理由で、呼ばれもしない太夫の部屋に入れてもらえるほど規律の緩い社会ではない。松葉屋も例外に漏れず厳しい規則が定められており、遊女は等しく教育を施され、働かされていた。

むしろ厳しすぎるほどの経営方針ゆえに心身を壊す女が多い、と悪い意味での評判があったほどだ。それは、廓の在り方に対して楼主・草嶋が積極的に関わり、口を出していた頃までの話である。

6

経営が軌道に乗り、自分が不自由無い暮らしをできるようになった後、草嶋は松葉屋の管理を遣り手の瀬川に任せ、当の本人は面白おかしく遊び歩くようになった。

自分たちの稼ぎがそんな男の楽しみの足しにされているなど、考えただけで吐き気がする思いではあったが、草嶋が離れてからの松葉屋での暮らしは以前と比べて大分楽になっていた。

誰かが言った。

「ようよう、籠の中の自由を手に入れたえ」と。

＊

「代わりであっても来た分の働きはするよ」

そう言って雛菊は頼まれてもいない掃除やら何やらをせっせと行ない、

「働いた分、甘えさせてもらうんだからね！」

と、理不尽にもひざ枕を要求し、そうこうするうちに眠ってしまったのである。

仕事を始める刻が迫り、目を覚ました雛菊に夕霧が問いかける。

「嫌なことでもありんしたかえ？」

「嫌なことなんて…、」

一瞬目を伏せ、だがすぐに顔を上げて、何も無いかのように明るい声で答えた。

「嫌なことなんて無……、」

無い、と言い切る前に言葉が途切れる。雛菊は夕霧の白い両腕によって、ふんわりと包み込まれていた。

「鯉お姐さん…」
腕をほどこうかとも考えたが、そうはせず、姉女郎の優しい温もりに身を預けた。
「思えば出会ったあの日から、そうやって明るく振舞っていたものえ。たまには弱音を吐いたって、だあれも怒ったりなんかしんせんよ？」
背中をポンポンと叩きながら、まるで子供をあやすかの様に夕霧が言う。その声は雛菊を、優しく静かに包みこんだ。
「…うん、ありがとう。
あたしはいつまでも頼りない妹女郎だね、お姐さんの前ではさ」

7

「頼りがいのある妹よ、菊姫は」
「本当？嬉しいな、フフッ」

そんなやり取りの後、「仕事前の一服」と言って煙管をくわえる雛菊。
「お子にまた叱られんすよ」
「大丈夫だよ。だって煙草じゃなくて煙管だもの」
「それは屁理屈と違いんすか？」
「違うもん、屁理屈違うもん」
子供のように駄々をこねる。が、火を付ける前に口から煙管を離す雛菊であった。

「さてと…、」
立ち上がる雛菊に夕霧が尋ねる。
「そういやあの子、雲姫は泣いてんせんか？」
「出雲は意外に強い子みたいよ。
目指せ花魁太夫！とか言ってたしね」
キョトンとする夕霧を見て、雛菊は笑いながら煙管に火を付けた。

煙を深く吸い込み、それをフワリと吐き出す。
ふと尋ねた。
「鯉お姐さんはさ、太夫になって後悔したことないの？」

スッ…と、優雅に立ち上がる夕霧。意志を乗せた強い言葉を放つ。
「後悔なんぞしやんせん。
わっちは夕霧太夫、儚く魅せるは霧の夢でありんすえ」

もう一度煙を吸い込んでから、雛菊は笑って言った。
「後悔する間にたんまり稼ぎましょうえ」
「その言葉遣いはどうにかなら…、」
「どうにもなりんせん。
けれども悔いはありんせん！」

悔やんでいる暇なんて無い、自分自身にそう言い聞かせる。

二人は笑い合い、そして自らの割当分を消化するため、持ち場へと向かった。
それぞれが、それぞれの想いを胸に抱いて。

1（前書き）

［幇間の章］

一八（いっぱち）…太鼓持ち。

狐彦（こひこ）…道化師。

紀伊国屋文左衛門（きのくにやぶんざえもん）…大商人。

1

身体が重い…、それにすごく寒い…、まるで冬の海にでも突き落とされたみたいだ……。
力無く投げ出した腕、腕の先…、手指の先端から凍っていき、だんだん腐って…、肉片がボロボロと崩れ落ちていく…。
ああ、腕が落ちた…。
両腕も両足も、腹、胸、首も…、顔もボロボロと…。
不思議と痛みは無い。
だけど寒い…、とても……。

……夢？
そうか、夢だから痛くないのか。
そうだよな、もしこれが現実なら…、痛くて痛くて堪らないはずだ。
だったら早く目覚めないと、こんな夢を見続けていたら気がおかしくなっちまう……。

……。

男が一人、たった今絶命した。
海の中を漂っているわけではなく、冷たくて暗い路地裏に横たわっているのであった。
その姿は…、身体が腐ってボロボロに落ちているなんてことはないが、腹から血を噴き出し、その血が着物も皮膚も真っ赤に染めていた。

彼の職は野太皷だが、今日は珍しく座敷で”仕事”をしていた。
それが今からほんの半日前の出来事であるとは、腹をパックリと

開いてその鮮血に染まる男の姿を見る人々には、すぐには信じられないことであろう。

時は、半日前に遡る……。

＊

花街・吉原、ここは松葉屋。騒がしすぎるほどに野太い笑い声が溢れる一室では、豪商たちの宴会が開かれていた。

一言に豪商と言っても、どのような荷を運び、どれほどの品物を扱った商いをしているのかなぞ、しがない野太鼓でしかない一八には見当もつかなかった。

ただ、金を撒き散らして遊び狂えるほどの羽振りの良さを見ていると、公には自慢できないような商売で稼いでいるのではないか…と、なんとなしに感じてしまう。

2

”しがない野太鼓”である一八がどうして松葉屋にいるのかを説明するには、時をさらに半刻ほど遡らなければならない。

皮膚を焦がすほどの暑い陽射しが降り注ぐ真っ昼間。一八は腹を空かせており、とりあえずの昼飯代だけでも稼ごうと、往来で得意の踊りを披露していた。

しかし金は一向に集まらず、それどころか立ち止まって見ていく輩すらいない。ただいたずらに、体力を擦り減らしてしまうだけであった。

そもそも幇間という仕事は、宴席や座敷で芸者と旦那の間を取り持ったり、自ら芸を見せて場を盛り上げたりすることを生業としている。

そうした席での人間関係のしがらみに捕われたくない、あるいは宴席に呼んでもらえるほどに実力や名声が伴わない幇間は、路上で芸を行って日銭を稼ぐ野太鼓として、生計を立てていた。

ちなみに、一八が野太鼓である理由は後者である。

仕方がないので、一八は知り合いの姐さんたちの所を回って食事にありつこうとした。

だが留守であったり、せっかく女を見つけてもその女に追い払われてしまったりして、さっぱり上手くいかないのであった。

なかばヤケになり、大声を出して大衆の注意を引いてみる。

「さあさあ、お立会い！

寄って見てって金落としてよ！

お江戸一番、花一番、一八様の大道芸！

さあさあ今しか見れないよ！
寄って見てって、さあさあさあ！！！」
意味の無い適当な文句であったが、よく通る声とテンポの良い調子がウケてわらわらと人が集まって来た。

この機を逃す手はないと、自信の芸を披露する。
懐から、小さく折り畳んだ一枚の和紙を取り出した。広げた大きさは約半畳。
服の中から出てきた紙の大きさは人々が予想していた以上に大きかったため、それを翻して見せただけでわっと歓声が湧き起こった。

3

勢いづいてきた一八は、再び意味の無い口上を述べる。唄を歌うかのように。

「太鼓の芸はチントンシャン、お髪の芸はチャンリンシャン！
これぞ我が芸十八番、ならぬ一八、一八番！」

拍子木のようにカカンッと足を踏み鳴らし、広げた紙を蛇腹に折っていく。

「蛇腹が屏風に早変わり！
屏風挟んで男と女、言い争うは蚊帳の外、それ！」

屏風に見立てた蛇腹紙を使い、半身を女、半身を男に見せて、入れ替わり立ち替わる一人芝居。一八自身が述べているように、彼が最も得意とする芸である。

「なああんた、顔を腫らしてどうしたの？
誰ぞあんたを殴ったの？」

カカンッ！

「お前待ち待ち、蚊帳の外にて蚊に食われ」

パンッ！

足を踏み鳴らし、平手を叩き、蛇腹を生き物のように動かしながら漫談を進めていく。

内容はたいした物でなくて良い、大事なのは世界を作ること。一八が言葉と拍子で作り上げる世界は、人々を容易に引き込んだ。

一八が間を置いてきっちり”決め”る、そのたびに大衆から拍手と歓声が湧き上がる。

よしよし、これなら今日の昼は鰻にでもありつけそうだ。
そんな皮算用をして内心ほくそ笑んでいた一八は一瞬だけ集中力を途切らせたが、その一瞬が命取りとなってしまった。

男役と女役を入れ替える時、ほんの少し力を込めすぎた。そうした力加減が、手にした紙へと即座に伝わってしまう。そして、必然的にそうなるであろう結果が生じる。

和紙の破けるビリッという音が響き、その音が人々を現実に連れ戻す。屏風はただの薄い紙に戻り、言い争う二人の男女は、小汚い恰好をした一人の太鼓持ちへと姿を変える。
あっという間に場が白け、大波で堤防が倒壊したかのように、人垣がサアッと散っていった。

4

「タダ見はお断りなんだよ、馬鹿野郎！」
あとに残るのは、悪態をつく一八の虚しい声、そして……、
「やあ、素晴らしい！
これほどまでに引き込まれたのは久々ですよ。どうかあなたのお名前をお聞かせ願えませんか？」

あれだけ賑わっていた往来もすっかり寂しくなってしまった路上で、ただ一人、一八に向けて拍手を送る男。
目は細く、鼻はスッと通り、唇は薄い。普通と比べて色が白く、しかし、髪の色は青みがかった黒。その容姿を例えるなら…、狐。

「……おいらは一八。あんたは？」
「名は体を表すなんて言いますがね、私はよく狐みたいだと言われますよ。
私の名は狐彦、コーンコンっと」
狐彦は招き猫のように腕をヒョイと上げ、手で狐の形を作り、鳴き声を真似て見せた。

「よろしくね、一八さん」
「あ、ああ…」
一八は思った、どこか気味の悪い男だ、と。

＊

再び場面は遊郭・松葉屋。
一八が昼飯代を稼ぐ為に芸を披露していたことを知った狐彦は、それならばと、ここに連れて来た。

狐彦の主、一八にとっては名も知らぬ”豪商”が、有り余る財産の一部を用いてこの松葉屋を丸一日貸し切ったらしい。
前日の夕刻から今日の夕刻まで。

要するに、たらふく食べて酒を浴び、取っ替え引っ替え女を抱いて幾度も精を抜かれ、足腰が立たなくなった最後に、幇間の芸でも見ながら自分の偉大さを再確認する、富豪特有の自己陶酔を手伝え、というわけらしい。

一八は正直胸糞悪い気分であったが、上手くいけば心付けを多めに貰えるかもしれないという思いから、その申し出を引き受けることにした。
そして結果は、考えていた三倍もの心付けを貰うことができ、主も一八も上機嫌で松葉屋を後にしたのであった。

5

「へへへ、旦那様。
こんなに頂いちゃって、なんかすいやせんねえ」
「構わん構わん。お前の芸は素晴らしかった！
ここに来た時にはまた頼むよ、ガッハッハッハッ！！！
そうだ、狐彦よ、彼に美味い飯でも奢ってやりなさい。わし達は先に帰って寝るからな！」
「わかりました、ここでお別れでございます。
紀文様、帰りの道中お気をつけませ……」

＊

一八のたっての希望で、二人は鰻屋に入って食べていた。
「いやあ…、世の中にはすげえ金持ちがいるもんだなあ……。
あの旦那、紀文っていうのかい？」
「紀文は略称、本名は紀伊国屋文左衛門。名前くらいは聞いたことありませんか？」
「き、きのくにやだって！？
大門を打ったあの紀文大尽か！？」
”大門を打つ”、つまり『吉原全てを買い切り、大門をたて切って一人で遊ぶ』、そんな男の夢を実際にやってのけたこともある、誰もが知る金持ち中の金持ちであった。
「はああ…、そりゃあ遊女屋一軒くらい楽に貸し切れるよなあ……」
「ハハハハッ」
心底たまげた様子の一八を見やり、狐彦は笑っていた。
初めのうちこそ気味の悪い男だと思ったが、こうして話しているうち、なかなかどうして楽しい男じゃないか、と一八は感じていた。

狐彦は北国の生まれだが、捜し人がいて各地を旅し、手持ちの銭が尽きたときは得意の芸で稼ぐ、そのような生活をしていたらしい。
その旅の道中、紀文に芸を見初められ、江戸までという条件でこの街まで同行して来たようだ。

「ってことはさ、あんたも野太鼓なのか？」
まだ湯気が上がる鰻を頬張りながら、一八は尋ねた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3135y/

吉原幻想草紙

2011年11月24日21時54分発行